

〔報告〕桃山文化期における輸入漆塗料の流通と使用に関する調査（Ⅱ）

著者	北野 信彦, 小檜山 一良, 木下 保明, 竜子 正彦, 本多 貴之, 宮腰 哲雄
雑誌名	保存科学
号	48
ページ	133-145
発行年	2009-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1440/00003747/



〔報告〕 桃山文化期における輸入漆塗料の流通と使用に関する調査（Ⅱ）

北野 信彦・小檜山 一良*・木下 保明*・竜子 正彦*・
本多 貴之*²・宮腰 哲雄*²

1. はじめに

前報では、京都市の中心部に所在する町屋跡から多数出土した「四耳壺」と呼称される陶器片に付着固化した黒色の漆様樹脂に関する調査の報告を行った。調査の結果、この焼メ陶器製の肩部の四方に馬蹄形状の取手を持つ壺は、タイ・カンボジア・ミャンマー周辺の東南アジア地域で生産されたものであり、これに付着固化した漆様樹脂はブラックツリーの生漆原液であることがわかった。

この資料群の出土年代は、文化史年代でいう鎖国以前の東南アジア交易が活発な近世初頭期から江戸時代前期（16世紀末～17世紀前期）頃の「桃山文化期」に相当する。この点を反映するように、平戸および長崎の『オランダ商館長の日記』には、タイ（文献史料は旧国名のシャムと記載するが、ここでは論文構成上の混乱がないように、以下現代国名のタイと統一して呼称する）やカンボジア、ベトナム、中国華南から大量の漆塗料が日本国内に輸入されたことが記録されていた。そのため、これらは当時の輸入漆塗料の存在を示す「物的証拠」の一つであると指摘した¹⁾。

ところが、このような東南アジア交易を通じて日本にもたらされた桃山文化期の輸入漆塗料は、その後どのようなシステムと作業工程を経て日本国内で流通し、どのような状況と場所で使用されたかについては不明な点が多い。筆者らによる前報以後の継続調査では、漆塗料を充填した壺以外にも同じゴミ廃棄土壌からは漆塗料に関連する出土遺物がいくつか確認された。また、周辺遺跡からもほぼ同年代の漆塗料に関連する出土遺物が発掘された。本報ではこれらについて、自然科学的手法を用いた調査を行った。併せて輸入漆塗料に関する文献史料を用いた基礎調査も継続して行った。この主目的は、今回新たに確認された東南アジア産の漆塗料を分配した方法を知る上で重要な「物的証拠」を公表することにある。

2. 遺跡と漆塗料に関連する出土遺物の概要

2-1. 左京三条四坊十町跡（柳池中学校内遺跡）

（財）京都市埋蔵文化財研究所による京都市中京区御池通富小路西入東八幡町に所在する左京三条四坊十町跡の発掘調査では、近世初頭期～江戸時代前期（17世紀初～中期）頃に年代観が比定される町屋跡の遺構と遺物が多数検出された。前報では、このうちの発掘調査区北側の大型ゴミ廃棄土壌から出土した輸入漆塗料を汲み溜めた「四耳壺」を取り上げて調査を行なった。この遺跡の調査概要は、既刊の（財）京都市埋蔵文化財研究所による発掘調査報告書に詳しいが、この壺容器群以外に漆塗料に関する報告は為されなかった²⁾。今日の発掘調査事業では、膨大な数量の出土遺物すべてを網羅的に発掘調査報告書に所収することは物理的にも事業経費的にも不可能である。そのため報告書の作成では、主要な成果のみを取捨選択してその事実報告に終始することが一般的な措置であり、実際はそれ以外の出土遺物も多数存在する。幸いこれまでの調査により、この遺跡から出土した輸入漆塗料の存在は極めて重要であることの

*京都市埋蔵文化財研究所 *²明治大学理工学部

共通認識が京都市担当者の内部でも得られた。そのため、改めてこれら膨大な出土遺物群のなかに壺容器群以外に漆塗料に関連する出土遺物が存在するかどうかに関する再確認作業を行なうことになった。

その結果、この四耳壺容器と同じゴミ廃棄土壌から漆塗料が付着固化した漆蓋紙と思われる出土遺物片7点（試料 No. 1-1～1-7, 写真1-1）、漆塗料を汲み溜めた曲物底板1点（試料 No. 1-8, 写真1-2）、漆塗料が全体的に厚く付着固化するとともに、一部溶液汲み出し時の液垂れの雫下も明確に観察される底部を意識的に打ち欠いた呉須染めの肥前磁器碗1点（試料 No. 1-9, 写真1-3：口絵参照）、漆塗料が付着した木製のへら2点（試料 No. 1-10, 1-11）、赤色漆が毛部分に付着固化した漆刷毛1点（試料 No. 1-12）、合計12試料の漆塗料に関連する出土遺物の存在を確認した。



写真1-1

試料 No. 1-6 が付着
固化した漆蓋紙



写真1-2

試料 No. 1-8 を汲み
溜めた曲物容器の底板



写真1-3

試料 No. 1-9 が付着
固化した肥前磁器碗

写真1 左京三条四坊十町跡出土遺物例

2-2. 左京三条三坊十町跡（三条町屋跡遺跡）

（財）京都市埋蔵文化財研究所では、2007年4月～5月にかけて、京都市中京区両替町通御池上ル金吹町に所在する民間マンション建設に伴う事前の発掘調査を実施した。遺跡は、鎌倉時代から室町時代の中世期には押小路殿・二条殿御殿跡、天正年間の織豊期には二条殿御池城跡に相当する。前記した左京三条四坊十条跡の遺跡とは数百mほど離れた同じ御池通沿いに所在し、東面に烏丸通、北面に押小路通が通り、西面は両替町通、南面は御池通に接する商業地の中心部に所在する。発掘調査の結果、左京三条四坊十条跡とほぼ同じ時期の近世初頭期～江戸時代前期（17世紀初～中期）頃に年代観が比定される町屋跡の大型ゴミ廃棄土壌が検出された（図1、写真2）。この遺構からは、大量の生活用具とともに漆様樹脂が付着固化した漆蓋紙（試料 No. 2-1, 2-2）、同じく漆塗料の曲物容器（試料 No. 2-3-1）、漆漉布や漆漉

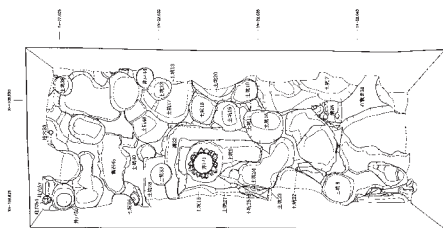


図1 左京三条三坊十町跡の遺構平面図



写真2 左京三条三坊十町跡の大型ゴミ廃棄土壌（京都市埋蔵文化財研究所）

紙（試料No.2-3-2, 2-4）、漆塗料を一旦汲み溜めたため、付着固化した唐津碗や志野織部皿などの陶器片（試料No.2-5, 2-6, 2-7, 写真3：口絵参照）が一括で出土した³⁾。

これらの年代観は、漆塗料を一旦汲み溜めた容器として再利用された唐津碗や志野織部皿の陶器片がいずれも肥前磁器の生産が開始される以前の17世紀初頭から前期頃（国産陶磁器編年による）に比定されるため、これにしたがうものとする。すなわち、これらはいずれも桃山文化期の漆器生産工房に関連した出土遺物（漆工用具類）であり、まさに本試料群が実在した寛永年間頃の京都市中の様子が克明に描かれた『舟木本洛中洛外図屏風』の中に見える京都市中町屋内の漆器職人の工房の店先を彷彿とさせる漆工用具類の「物的証拠」の一つであるといえる（図2：口絵参照）。



写真3 試料No.2-5を汲み溜めた志野織部皿



写真2 舟木本洛中洛外図屏風に描かれた漆師屋工場の様子

3. 出土した漆塗料の観察と分析

3-1. 調査対象試料

今回調査を行った漆塗料は、2-1で概要を記した左京三条四坊十町跡（柳池中学校内遺跡）出土の漆刷毛に付着固化した赤色漆（試料No.1-12, 写真4：口絵参照）を除き、いずれも艶光沢がある黒い色相が強い漆塗膜と、同じように艶光沢があるものの、前者よりはやや透明感が強い赤褐色の色相を有する漆塗膜片の2種類に肉眼観察では大別される。一方、2-2で概要を記した左京三条三坊十町跡（三条町屋跡遺跡）出土遺物は、肉眼観察では漆漉紙や漆漉布に付着固化した赤色漆（試料No.2-4）を除き、いずれもちぢみムラが一部に観察される黒色や赤褐色の色相を有する漆塗膜片である（写真5）。すなわち、本調査対象試料は艶光沢

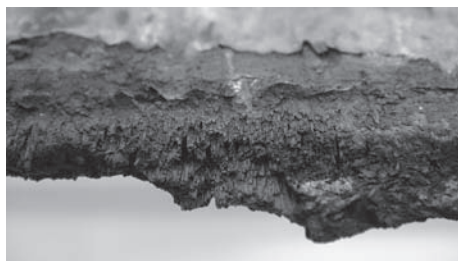


写真4 試料No.1-12が付着固化した漆刷毛先部分の拡大

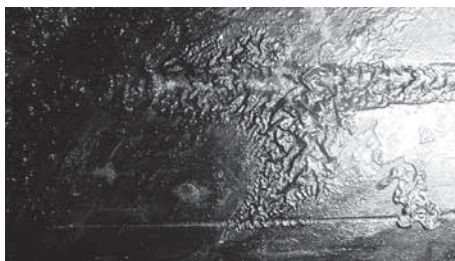


写真5 漆塗料のちぢみムラの様子

があり黒い色調が極めて強い漆塗膜，同じく艶光沢があるものの透明感が強くやや赤褐色の色調を呈する漆塗膜，艶光沢が少なく赤褐色や黒色の色調を呈する漆塗膜など，やや表面状態が異なるグループが混在していた。この点をふまえて，各試料は数ミリ角程度の剥落小片をそれぞれ注意深く採取して，それぞれの分析試料として供した。

3-2. 分析調査の方法

3-2-1. 漆塗料の表面状態の観察

まず，各試料の表面状態を肉眼観察したうえで，漆塗料の固化状態や夾雑物の混入状況などの細部は，金属顕微鏡（オリンパス社製 BH 型）による200～500倍の低倍率で顕微鏡観察した。

3-2-2. 漆塗膜の内部状態

各試料の1 mm × 3 mm 角程度の剥落小片を，合成樹脂（エポキシ系樹脂 / アラルダイト GY1251J.P, ハードナー-HY837）に包埋した後，断面を研磨して薄層プレパラートに仕上げた。その上で，断面薄層の厚さや色調，ゴム質などの固化状態，夾雑物や顔料の有無などの内部状態を，金属顕微鏡および生物顕微鏡を用いて透過および落射観察した。

3-2-3. 漆塗料の主要脂質成分の分析

各試料の主要脂質成分の分析は，試料小片を明治大学設備の熱分析装置に入れ，500℃で12秒間熱分解させた上でGC/MSに導入した。測定装置は，熱分析装置（フロンティア・ラボ製 PY-2010D）とガスクロマトグラフ（HP 製 HP689），質量分析装置（HP 製 HPG5972A）で構成され，分離カラムには Ultra Alloy PY-1（100% methylsilicone, 30m × 0.25mm i. d, film 0.25 μm）を使用した。

3-2-4. 漆ヘラおよび漆刷毛の樹種同定

漆ヘラと漆刷毛の木部の樹種同定を行った。通常，樹種の同定作業は，出土木材の細胞組織の特徴を生物顕微鏡で観察し，その結果を新材と比較することで為される。試料は，カミソリの刃を用いて遺物本体をできるだけ損傷しないように，破断面などオリジナルでない面から木口，柀目，板目の三方向の切片を作成した。切片は，キシレン・サフラニンにより脱水および染色して検鏡プレパラートに仕上げた。

3-2-5. 赤色漆の使用顔料の分析

各試料に付着固化した赤色漆の使用顔料の構成無機成分は，数ミリ角程度の剥落小破片を分析用カーボンテープに固定した上で，堀場製作所 MESA-500型の蛍光X線分析装置に設置して分析した。分析設定時間は600秒，試料室内は真空状態，X線管電圧は15kV および50kV，電流は240μA および20μA，検出強度は200.000～250.000cps，定量補正法はスタンダードレスである。

3-3. 分析結果

調査対象試料のうち，2-1で概要を記した左京三条四坊十町跡（柳池中学校内遺跡）出土の試料 No.1-1, 1-2, 1-3, 1-4, 1-5, 1-6, 1-7, 1-8 の内部状態を観察した結果，いずれも数十μm程度の球状抜け穴が多数観察されるとともに，繊維幅が広い和紙繊維の交錯した絡まりが認められた（写真6, 7）。そのためこれらは当初推定したとおり，いず

れも漆塗料を汲み溜めた漆塗料容器の口を塞ぐ漆蓋紙であることがわかった(写真8)。また試料No.1-10, 1-11の漆へらは、2点とも白木の柾目材をへぎ割りしたうえで、しなりを得るためにへら先の先端はそぎ落として細くしてあった。その上で、一旦漆塗料を全体的に塗布する木固め作業も為されていた。樹種同定の結果、2点とも針葉樹ヒノキ科ヒノキ材であった。このうちの長さ25.0cm×へら先の最大幅約6.0cmを計るほぼ完形の資料は、へら先の上端をカットする作業もなされていた。そしてへら先を中心に付着固化していた漆塗料(試料No.1-10)は、細かい夾雑物を多く含むためか表面の艶光沢は少なくざらついているものの、液垂れの雫下した部分は黒色を呈するやや肉厚で平滑な固化塗膜が観察された。また、漆へらの下端部分のみが割れた状態で残存していた破片資料も、へら先のカット角度を完形資料と合わせると、基本的には両者同じ形状と寸法を有する資料であることがわかった。そしてこの破片資料のへら先を中心に付着固化していた漆塗料(試料No.1-11)は、やや赤褐色系ではあるが極めて艶光沢が強く透明感がある肉厚で平滑な固化塗膜を有していた。しかし詳細に観察すると、このなかにも細かい夾雑物の混入が観察された(写真9)。そのためこれらは、いずれも生漆の精製作業の一つである「なやし」や「くろめ」などの樹液攪拌作業、さらには樹皮かすなどの不純物の漉し作業などが積極的には行われていない生漆状の原液塗料の溶液であると理解した。この漆へら2点は、いずれも形状や寸法、製法面などが今日の伝統的な漆工技術の分野では下地付けや漆塗料を移し替える際に使用する漆へらと極めて類似している(写真10:口絵参照)。形体上や寸法、製法の類似点は漆刷毛の場合も同様である(写真11:口絵参照)。このことは、本報の調査の主目的ではないが、これらがこれまで語られることが少なかった今日使用されている伝統的なへらや刷毛などの漆工用具の形体の起源が、少なくとも寛永年

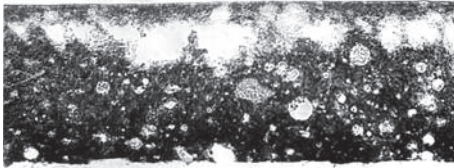


写真6 漆蓋紙に付着固化した漆塗料の断面観察(×400)

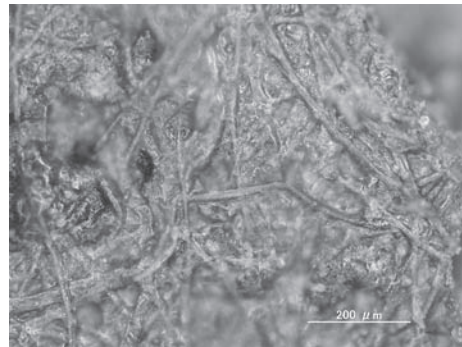


写真7 漆蓋紙に観察される和紙繊維



写真8 漆蓋紙の付着した漆塗料(参考)

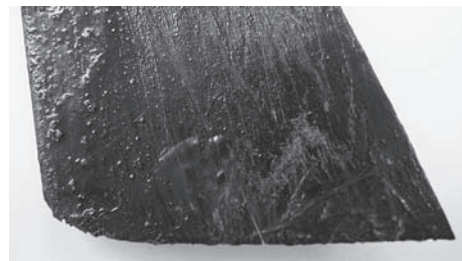


写真9 漆へら先端部分の漆塗料(試料No.1-11)の付着固化の状況

間には確実に遡ることを示すという重要な「物的証拠」の一つであることも意味していよう。

次に、これらの漆塗料のPY-GC/MS分析を行なった^{4,5)}。その結果、漆蓋紙に付着した試料5点(試料No.1-1, 1-4, 1-5, 1-6, 1-7)、漆塗料の曲物容器の底部に付着残存した試料No.1-8、呉須染めの肥前磁器碗に付着固化した試料No.1-9からは*Melanorrhoea usitata*のチチオール成分のみが検出された(図3)。その一方で、同じ漆蓋紙と思われる出土遺物片でも、*Melanorrhoea usitata*のチチオール成分と*Rhus Succedanla*のラッコール成分の両者の成分が、また日本・中国産漆樹液に特徴的な*Rhus vernicifera*のウルシオール成分のみが検出された試料もあった(図4, 5)。

また、形体や寸法、基本的な製法が類似する2本の漆ヘラに付着固化した漆塗料(試料No.1-10, 1-11)では、試料No.1-10は、日本・中国産漆樹液に特徴的な*Rhus vernicifera*のウルシオール成分やベトナム産漆樹液に特徴的な*Rhus Succedanla*のラッコール成分は含まれず、側鎖に芳香環を持つ*Melanorrhoea usitata*樹液特有のチチオール成分が検出された。試料No.1-11には、タイやカンボジア産の漆樹液に特徴的な*Melanorrhoea usitata*のチチオール成分とベトナム産漆樹液に特徴的な*Rhus Succedanla*のラッコール成分の両者のピークが検出された。

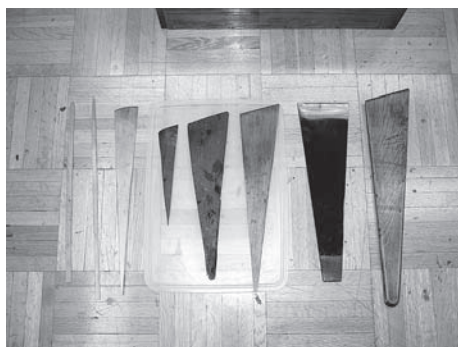


写真10 出土漆ヘラと今日の各種漆ヘラ刷との形態比較

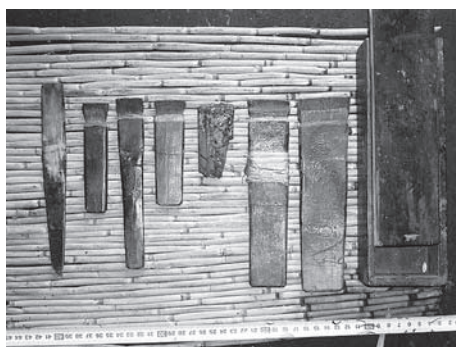


写真11 出土漆刷毛と民具資料である各種漆刷との形態比較

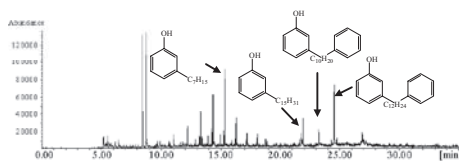


図3 試料No. 1-1, 1-4~1-10のGC/MS分析結果(チチオール)

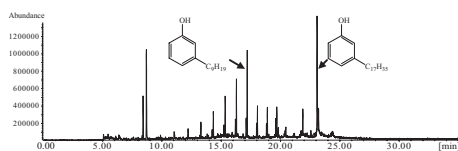


図4 試料No. 1-2, 1-11のGC/MS分析結果(チチオール+ラッコール)

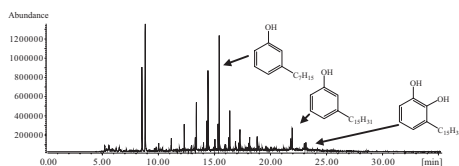


図5 試料No. 1-3, 2-1~2-7のGC/MS分析結果(ウルシオール)

さらに幅3.5cm × 残存長さ7.5cm を計るスギ科材の柄を有する漆刷毛の刷毛先の赤色漆(試料 No. 1-12)からは, *Rhus vernicifera* のウルシオール成分と *Melanorrhoea usitata* のチオール成分の両者の特徴を示すピークが共存して検出された(図6)。

また, 2-2で概要を記した左京三条三坊十町跡(三条町屋跡)の桃山文化期のゴミ穴廃棄土壌から一括出土した漆蓋紙に付着固化した試料 No. 2-1, 2-2, 曲物容器に付着固化した試料 No. 2-3-1, 唐津碗や志野織部皿などに一旦汲み溜められた試料 No. 2-5, 2-6, 2-7, 漆漉布に付着固化した試料 No. 2-3-2, 2-4などの漆塗料からは, いずれも *Rhus vernicifera* のウルシオール成分のみが検出された。

そして, 左京三条四坊十町跡出土の漆刷毛と左京三条三坊十町跡出土の漆漉紙および漆漉布に付着固化した赤色漆の使用顔料をそれぞれ定性分析した結果, 前者の漆刷毛からは鉄(Fe)の強いピークのみが, 後者の漆漉紙と漆漉布からはHg(水銀)の強いピークのみが検出された(図7, 8)。前者はベンガラ漆, 後者は朱漆と推定される。

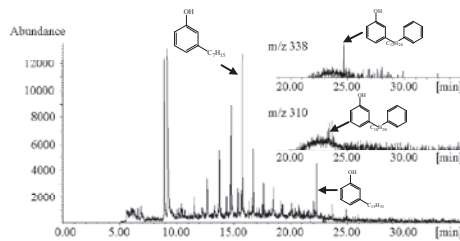


図6 試料 No. 1-12の GC/MS 分析結果(チオール+ウルシオール)

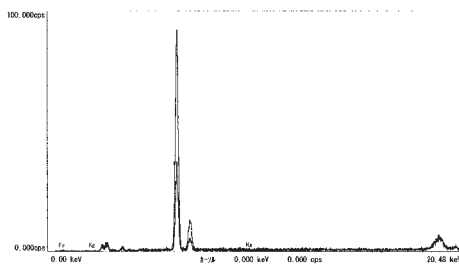


図7 試料 No. 1-12の赤色漆の蛍光 X 線分析結果

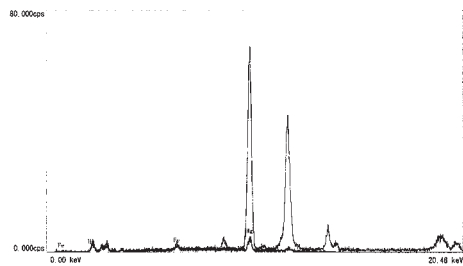


図8 試料 No. 2-4の赤色漆の蛍光 X 線分析結果

4. 文献史料の調査

安永6年(1776)に長崎商館長フェイトの侍医として江戸へ旅したスウェーデン人 C. P. ユンペリーは, その著書『江戸参府随記』のなかで, オランダによる長崎交易の状況についても言及している。それによると, 交易開始当初は生糸・ラシャ地などの繊維製品や蘇木, 鮫皮, 水銀, 麝香などさまざまな品目があったことを挙げ, このなかには漆も含まれていた。そしてこれら交易品により「平戸時代, その利益は相当なものであった」としている。その一方で「日本で製造される漆器製品は中国やシャム, その他世界のどの製品をも凌駕する。それらは最上質の松や杉材を使い, ウルシノキ(*Rhus vernix*)から採れる最高の漆を塗る」として, 日本産漆塗料が良質であるとの認識も示している⁶⁾。

さて、平戸から長崎に交易の場が移行する寛永年間は、「南蛮交易」や「御朱印交易」などを通じて東南アジアやヨーロッパ諸国との交易活動が活発な時代であった。前報で報告したように、この時期の平戸および長崎交易の状況を克明に記録した『イギリスおよびオランダ商館長の日記』には、タイ・カンボジア・ベトナム・中国華南などから日本へ年間50~100トン近くが算定される大量の輸入漆塗料の生漆原液が輸入されており、国別ではカンボジアとタイからの輸入量が多かったようである。

それではこのような漆塗料はどのような形で輸入されていたのであろう。慶長19年(1614)にイギリス商館事務員リチャード・ウィッカム(しによろ様)へ宛てた『作右衛門積荷覚書』には、「漆壺 拾二」と記録するように漆は壺単位で数えられている(史料1)。またオランダ商館長記録においても、日本語翻訳ではあるが元和2年(1616)7月26日の記録に「黒漆(ナムラック)の入った壺12本をも受け取った」と記すように漆はピコル、カッティーなどの単位とともに壺単位で数えられる場合、さらには元和元年(1615)10月8日の記録に「五本の竹弧包に入った黒い塗料」とあるように竹弧包みの場合もあったようである⁷⁾。そのため『南蛮図屏風』に描かれた竹籠入四耳壺と類似した形体を有する本遺跡から出土した四耳壺の焼メ陶器は、輸入漆塗料を充填した当時の一般的な運搬容器であったといえよう。

和文翻訳が刊行されている寛永『オランダ商館長の日記』には、「漆」「黒漆」などと固有名詞が使い分けられるとともに品質差もあった輸入漆塗料は、長崎と京都・大坂・江戸・伏見・堺の5箇所の幕府直轄地の有力御用商人が長崎に向いて入札で落札取引したことや、漆塗料にはオランダ側と値段交渉を行う買受人も存在したことなどが記録されており、特定の条件下で国内流通したことがわかる。この際、東南アジア産の輸入漆塗料は、輸入時点の四耳壺容器に収納したままの壺単位で日本側の漆買受商人に売り捌かれたことが一般的であったと考えられるが、寛永20年(1643)9月23日の記録などには「若干の漆を計量して引き渡した」とあることから、オランダ商館側で漆塗料を計量して量り売りする場合もあったようである⁸⁾。この点に関連する記述として、寛永18年(1641)のオランダ商館の「仕訳帳」には、3月2日にシンエモン(新右衛門?)を借方として黒漆の掛販売の取引が行なわれたが、同年9月18日には同じシンエモン(新右衛門?)を貸方として掛売り商品である黒漆が差し戻されたことが記帳されている⁹⁾。ここからは、漆商人に一旦売り渡された輸入漆塗料であっても、年間で売り残った分はオランダ商館に買い戻させることが可能な商業システムが存在したのか、あくまでもシンエモン(新右衛門?)という漆商人はオランダ商館の商品取り扱いの代理窓口であったため、売れ残り商品はその都度差し戻すことが通常であったのかいずれかであろう。

(史料1)

「作右衛門積荷覚書 つつミ申覚之事			
一、すおふ木(蘇芳木)	請取申候	三百式十本	作右衛門
一、からかわに(唐革荷)	拾まる(丸)		
一、ゆたん須つミ(油単包)	三まる		
一、むしろ須つミ(筵包)	三まる		
一、けかわニ(毛皮荷)	拾五まる		
一、うるしつぼ(漆壺)	拾二		
一、ビスコつぼ(ビスコ壺)	四つ		
以上七つ			
八月廿二日	しによろ殿 参		作右衛門 (印)

表1 長崎交易輸入品の1ピコルあたりの品目別価格一覧

年	品目	1ピコルあたりの価格 (タエル)	備考	年	品目	1ピコルあたりの価格 (タエル)	備考
寛永17年 (1640)	中国産漆 (Chinesen lack)	13.28.30	大 小74艘のシナ・ジャンク船積荷	正保2年 (1645)	カボック (capock)	5	76艘のシナ・ジャンク船
	白糸 (witte rouwe sijde)	280.310.340			錫 (thin)	20	
	片撚糸 (getweerde sijde)	230~270			黒檀 (ebbenhout)	4	
	ボギー糸 (bogij)	140.200.270			水銀 (quicksilver)	50	
	ポイル生糸 (poolsijde)	250			鉾物染料 (coperroot)	195	
	水銀 (quicksilver)	60.65			インディゴ (indigo)	20	
	白蠟 (錫 spialter)	8.59.9.5			黒漆 (zwart lack)	30	
	明礬 (aluijn)	1.5			生糸 (rouwe zijde)	320	
	金色の大形蠟燭 (grote vergulde wasse kaersen)	30			ボギー糸 (bogij zijde)	320	
	網の染色に用いるタン皮 (taen tot verwen van netten)	1			白色縫糸 (witte nayzijde)	300	
	白砂糖 (witte poeijersuijcker)	4.9.5.7.6		ポイル糸 (poilzijde)	400		
	黒砂糖 (swarte suijcker)	1.6.2.8.3.2.5		トンキン産生糸 (Tonquinse zijde)	290		
	ふし糸 (繭; filose ofte huijskens van sijde)	12		水砂糖 (candijzuycker)	8.5		
	生糸 (rouwe zijde)	170.190.200		白砂糖 (witte zuycker)	6		
	上等の麻 (fijnen kennip)	8		黒砂糖 (zwarte zuycker)	2.3		
	蘇木 (roothout)	1		白砂糖 (witte zuycker)	6		
	カボック (capock)	4.2		黒砂糖 (zwarte zuycker)	2.3		
	胡椒 (peper)	15		蘇木 (zappanhout)	4		
	ナムラック (漆)	25		胡椒 (peper)	12		
	ボギー糸 (bogij)	150.210		麝香 (mnsusc)	30		
白糸 (witte rouwe sijde)	310	明礬 (alluyn)	2.1				
片撚糸 (getweerde sijde)	270	鉾物染料 (coperroot)	6				
白蠟 (錫 spialter)	8.7	シタウ (繭玉 zittouw)	16				
水銀 (quicksilver)	63	糖蜜 (zijroop)	3				
ポリボリア (椰子油の軟膏 borboria)	4	中国産茶 (Chinese thee)	15				
ロンガンセーク (薬種 ronganseck medicine)	30	蠟 (wasch)	22				
赤染料 (roode verw)	6.5	辰砂 (varmilioen)	130				
寛永19年 (1642)	カンボジア産ならびシヤム産漆 (Cambodias als Siams lack)	30	3, 4 艘のシナ人のジャンク船積荷	正保3年 (1646)	黒漆 (swart lack)	32	54艘のジャンク船積荷
	白生糸 (witte rouwe zijde)	260			白色生糸 (witte rouwe sijde)	300	
	ボギー糸 (bogij)	250			ボギー糸 (bogijzijde)	320	
	白蠟 (錫 spialter)	10			縫糸 (naayzijde)	300	
	ふし糸 (sitou)	10			ポイル糸 (poolzijde)	360	
	蘇木 (sappanhout)	7			トンキン産生糸 (Toncquynsche rouwe zijde)	280	
	氷砂糖 (candijzuycker)	6			真綿 (floszijde)	200	
	粉砂糖 (poyersuycker)	5.5			シタウ (粗製の生糸 sitouwe ofte groffwerck van sijde)	18	
	黒粉砂糖 (swarte dito)	4			胡椒 (peeper)	12	
	カボック (capock)	5			象牙 (oliphantstanden)	53	
	明礬 (aluyn)	2		錫 (tin)	12		
	丁子 (nagelen)	70		木香 (poetsiock)	40		
	胡椒 (peper)	12		白色粉砂糖 (witte poeyersuycker)	3.5		
	甘草 (soethout)	12		氷砂糖 (candijzuycker)	3.5		
	木香 (poetsjock)	50		黒砂糖 (swarte ditto)	2		
	肉桂 (caneel)	15		明礬 (aluyn)	2		
	土臥令 (radicx China)	10		鉾物染料 (cooperroot)	6		
	黒檀 (ebbenhout)	5		白檀 (sandelhout)	20		
	正保元年 (1644)	黒漆 (swart lacq)		18	54艘のシナ貿易のジャンク船積荷	沈香 (agerhout)	200
		中国産白生糸 (witte rouwe Chinese zijde)		350		麻 (kennip)	20
ボギー糸 (bogijzijde)		450	木油 (houtolij)	25			
シタウ (繭玉 sitouw)		20	蠟 (wasch)	20			
黒砂糖 (swaite suycker)		4	水銀 (quicksilver)	100			
氷砂糖 (candijzuycker)		8	蘇木 (sappanhout)	4			
蜂蜜 (hoonich)		10	白蠟 (錫 spialter)	24?			
茶 (t. siaa)		15	山帰来 (radix China)	15			
白蠟 (錫 spialter)		7	肉桂 (caneel)	20			
蠟 (was)		25	カソンバ (桂皮 casomba)	35			
沈香 (agurhoudt)		30	木綿糸 (catoene gaaren)	15			
カソンバ (cassomba)		7	ホミカ (craenooegen)	14			
山帰来 (radix China)		5	カンボジア産胡桃 (Combodische nootgens)	3			
白檀 (sandelhoudt)		5	ボレボリ (borriborrij)	6			
木香 (poetsioeq)		50	ガリガ (galijgaa)	15			
胡椒 (peper)		20	インディゴ (indigo)	20			
蘇木 (sappanhout)		4					

その一方で、寛永12年（1635）にオランダ商館と取引があった輸出漆器の生産工房のリストのなかに蒔絵屋シエモン（Makia Siemon：新右衛門？）の名前がある。オランダ商館長の日記によると、輸出漆器の多くは前年に、オランダ商館が京都、後に大坂も含めた蒔絵師などの漆器職人に銅型見本および事細かな漆の塗り方などを含めた仕様文書を添えて蒔絵漆器を注文した。翌年、出来上がった蒔絵漆器は前払した値段に従い長崎で受け取ったが、この際、出来上がった蒔絵漆器の支払い金額を巡り、両者の値段交渉が難航したことも多かったことが記録されている^{10, 11)}。この場合、日本の漆器職人は原材料費高騰を理由に値段のつり上げを行ったケースも多いとして、漆器の注文を出す際、あらかじめ木地や漆の原材料を用立てて職人に渡し、細工を注文することもあったようである。一例として、長崎商館が丸い皮楯の素胎を東南アジアから輸入し、インド（ベンガル）総督などの土産品として漆塗装と蒔絵加飾を行わせた事例が有名である⁹⁾。前記した「仕訳帳」に登場するシンエモン（新右衛門？）と蒔絵屋シエモン（Makia Siemon：新右衛門？）が同一人物であると仮定するならば、3月に引き渡された黒漆塗料は輸出漆器を製作するために現物支給された原材料であり、注文品である輸出漆器の製作終了時の半年後に余りの黒漆塗料の原材料をオランダ商館に差し戻したという考えも成り立つため、輸入漆塗料と輸出漆器を結びつける貴重な記録とも位置づけられよう。

以上のようなシステムと作業工程を経て日本で流通したと考えられる輸入漆塗料であるが、実際にはどのような価格であったのであろう。この点について、寛永16年（1639）11月3日の記録は「ナムラックすなわち黒漆（namracq ofte swarten lack）などが全部（入札により）人々に売り捌かれた。一中略— そしてナムラックが平均して38テール（タエル）5マースに売れたことから考えて、いずれも昨年程の高値にはならなかった」と記しており、大体の状況が垣間見える^{10, 11)}。しかし、当時の国産漆と輸入漆の価格を比較した文献史料は管見していないため、実態については全く不明である。ここでは『オランダ商館長の日記』に記録がある各年の長崎市場において値段が付いた1ピコル（約60kg）単位ごとの各種品目別の価格値段覚書から大まかな状況を把握した（表1）。その結果、寛永17年（1640）は中国産漆（Chinesen lack）1ピコルが30, 28, 13タエルの3種類とナムラック（漆）25タエルであり、この時の胡椒が15タエル、ロンガンセーク（葉種）30タエル、金色の大形蠟燭30タエルであった。また寛永19年（1642）にはカンボジア産およびタイ産漆30タエルの時にカンボジア・タイ・タイワオン産の鹿皮100枚につき30タエル、正保元年（1644）は54艘のシナ貿易のジャンク船として黒漆（swart lack）18タエルの時に茶15タエル、錫20タエル、胡椒20タエル、鮫皮100枚21タエル7マース、ちなみに辰砂は130タエルの値段が付いている。さらに正保2年（1645）は76艘の中国ジャンク船分として黒漆30タエルの時に中国製の漆塗り箱（Chinese verlackte doosen）308組で3080タエル（1組平均で10タエル）、蠟22タエル、中国製油25タエル、鹿皮100枚につき30タエルであり、正保3年（1646）には黒漆（swart lack）32タエルの時に、インディゴ20タエル、蠟20タエル、鹿皮100枚につき35タエル、カソンバ（肉皮）35タエル、木香40タエル、ちなみに象牙53タエル、水銀100タエルが記録されている¹²⁾。このように、同じ1ピコルあたりではほぼ同価格の他品目名をみると、当時の輸入漆塗料に関する一般的な認識の一端が理解される。

5. 結 論

以上のように、本報では、まず、前報で報告した四耳壺と同じ遺構から一括で出土した漆ヘラ2点と漆曲桶1点、漆蓋紙7点、漆塗料が厚く付着固化したロート状に底を打ち欠いた磁器碗1点、漆刷毛1点などに付着固化していた漆塗料の試料についてPY - GC/MS分析を行っ

た。その結果、これらの一括資料群からは四耳壺に付着固化していた漆塗料と同様にタイ・カンボジア産漆に特徴的なチチオールが検出された試料群、ベトナム産漆に特徴的なラッコール、日本・中国産漆に特徴的なウルシオールなどの3種類の異なる種類の漆塗料が存在していることが確認された。すなわち京都市中の中心地に所在する町屋跡の同じゴミ廃棄土壌には、東南アジア産や国産など、さまざまな産地や由来が異なる生漆塗料の原液が混在していたことがわかった。特に漆を移し替えるために使用したと考えられる漆ヘラと漆蓋紙付着の漆塗料からは、チチオール単独およびチチオールとラッコールの両者の特徴を有する漆塗料、さらには実際の漆器生産との関連性が直接的に理解される漆刷毛からはウルシオールとチチオールの両者の特徴を有する漆塗料がそれぞれ確認された。この点は、それぞれの漆塗料の性質を理解した上でブレンド(混合)作業がこの場所周辺で行われた可能性が指摘されるとともに、搬入されたタイ産の四耳壺から東南アジア産の輸入漆塗料を、漆ヘラを用いて日本産の曲物容器に移し替えて蓋紙梱包する、漆塗料の小分け作業の存在を示す「物的証拠」であるともいえる。今後、これらの流通や使用のあり方を推定する上で重要な参考となろう。

一方、同じ御池通沿いの三条町屋跡のゴミ廃棄土孔から一括出土した漆器生産工房に関連する出土遺物のうち、漆塗料を汲み溜めた曲物容器、漆蓋紙、漆塗料を一旦汲み入れたため漆塗料が付着した唐津碗・志野織部皿、漆漉布などに付着固化した漆塗料の分析調査を行った。調査の結果、これらからはいずれも日本・中国産漆に特徴的なウルシオールのみが検出された。また、同じ赤色漆の使用顔料でも、左京三条三坊十町跡(三条町屋跡)からは水銀(Hg)のピークが検出された朱漆のみ、左京三条四坊十町跡(柳池中学校内遺跡)からは鉄(Fe)のピークが顕著に検出されたベンガラ漆が出土しており、それぞれの時と状況に応じた顔料の使い分けが為されていたのであろう。

以上のように、今回の調査を通じて、同じ京都市中においても状況や塗装対象資料によって輸入漆、国産漆それぞれの性質を考慮に入れた漆塗料の使い分けやブレンド作業などが行われていた可能性がはじめて指摘された。いずれにしても、安土桃山―江戸時代前期の桃山文化期は、国内で大量の漆塗料の需要があった時代である¹²⁾。そのため、この一連の調査で存在が明らかとなった輸入漆塗料の存在は、当時の社会のなかにおいても重要な意味を占めたものと考ええる。

次の課題は、桃山文化期の日本国内における東南アジア産漆塗料の使用状況に関する実態調査を行なうことである。さらには、これら輸入漆塗料の供給地である東南アジア諸国では、16世紀末～17世紀前期頃においてどのような漆塗料の生産と流通が為されていたのかも今後知る必要がある。そのための試料収集調査の指針と注意点は、(1) 調査対象試料の性格が明確であること。(2) 調査対象試料の履歴が明確であること。(3) 調査対象試料の塗装年代が明らかであること。(4) 調査対象試料のサンプリングが可能であること、などである。この点を考慮に入れた調査の継続を今後も進めていきたい。

謝辞

本調査を進めるにあたり、(財)京都市埋蔵文化財研究所の長宗繁一・平方幸雄・吉崎伸課長には、試料収集の件で便宜を図っていただきました。また、伝統的な漆工材料については漆工品の修復技術者の山下好彦・松本達弥・北村繁氏らに貴重なご教示を受けました。あわせて謝意を表します。

引用文献

- 1) 北野信彦, 小檜山一良, 竜子正彦, 高妻洋成, 宮腰哲雄: 桃山文化期における輸入漆塗料の流通と使用に関する調査, 保存科学, 47, 37-52 (2008)
 - 2) 京都市埋蔵文化財研究所: 『平安京左京三条四坊十町 (柳池中学校構内遺跡) 跡』, (2007)
 - 3) 京都市埋蔵文化財研究所: 『平安京左京三条三坊十町 (押小路殿・二条殿) 跡』, (2007)
 - 4) Noriyasu Niimura, Tetsuo Miyakoshi, Jun Onodera, Tetsuo Higuchi: Characterization of Rhus vernicifera and Rhus succedanea lacquer films and their pyrolysis mechanisms studied using two - stage pyrolysis-gas chromatography/mass spectrometry , Journal of Analytical and Applied Pyrolysis, 37, 199-209 (1996)
 - 5) Kamiya Yukio and Miyakoshi Tetsuo: The Analysis of Urushi by Pyrolysis-Gas Chromatography and Mass Spectrometry, International Course on Conservation of Urushi 1999, TNRICP, 100-129, (1999)
 - 6) C. P. ツェンペリー: 『江戸参府随日記』, 東洋文庫, 平凡社, (1982)
 - 7) 東京大学史料編纂所編: 『日本関係海外史料・イギリス商館日記』, 原文編3巻, 訳文編4巻, 東京大学出版会, (1978~1982)
 - 8) 村上直次郎: 『長崎オランダ商館の日記』, 全3巻, 岩波書店, (1956, 1957, 1958)
永積洋子: 『平戸オランダ商館の日記』, 全4巻, 岩波書店, (1969, 1969, 1969, 1970)
 - 9) 山崎剛: 日本の美術Ⅱ 海を渡った日本漆器Ⅰ (16・17世紀), No.426, 至文堂, (2002)
 - 10) 日蘭学会編: 『日蘭交渉史研究会訳注: 長崎オランダ商館日記』, 1-10巻, 雄松堂, (1989~1999)
 - 11) 東京大学史料編纂所編: 『日本関係海外史料・オランダ商館日記』, 原文編9巻, 訳文編9巻, 東京大学出版会, (1978~2001)
 - 12) 東京大学史料編纂所編: 『大日本史料』, 第12編1-43巻 後陽成天皇・後水尾天皇, 東京大学出版会, (1968~1975)
- キーワード: 桃山文化期 (momoyama cultural period); 輸入漆塗料 (imported urushi paints); 出土漆ヘラ (excavated urushi spreading spatula); タイ・カンボジア・ベトナム (Thailand・Cambodia・Vietnam)

Study on Urushi Paints Used in the Momoyama Cultural Period (II)

Nobuhiko KITANO, Kazushige KOHIYAMA^{*}, Tomoaki KINOSITA^{*},
Masahiko RYOKO^{*}, Takayuki HONDA^{*2} and Tetsuo MIYAKOSHI^{*2}

In recent years, we excavated two archaeological sites in Kyoto city which contained many urushi objects: Sanjo-Machiya site and O-ike site. These sites are not far from each other but the origin of urushi material differed.

In Sanjo-Machiya site, many kinds of objects related to urushi manufacturing process were excavated: urushi paint brush, spatula, cover paper for urushi sap container and wooden vessels of the Momoyama cultural period. Results of pyrolyzed GC/MS of these objects showed that urushi paint was composed of *Rhus vernicifera* only, which is grown in Japan or China.

In O-ike site, same kinds of objects related to urushi manufacturing process as in Sanjo-Machiya site were also found. The excavated objects are same in shape as traditional urushi paint tools produced in Japan. The jars with four lobes for stocking black urushi were also found at that site and black urushi was assumed to be *Melanorrhoea usitata* sap paints, because the jars were imported from Thailand or Cambodia around the 17th century. However, by pyrolyzed GC/MS analysis, four types of composition of black urushi paints were found: *Melanorrhoea usitata* only, a mixture of *Melanorrhoea usitata* and *Rhus Succedanla* which is grown in Vietnam, *Rhus vernicifera* only and a mixture of *Melanorrhoea usitata* and *Rhus vernicifera*. We assumed that the excavated urushi objects were tools for transferring imported urushi sap paints from jars to small vessels and that urushi sap paints from many countries were blended and used in Kyoto during the Momoyama period.

^{*}Kyoto City Archaeological Research Institute

^{*2} Meiji University

